

# 連載コラム

## みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 18 回

バッタとイナゴ



本吉總男

# みずき野とその周辺の植物と昆虫

## (18) バッタとイナゴ

イナゴもバッタの仲間ですから、「バッタとイナゴ」というタイトルより、「バッタの仲間」とする方が適切かと思いましたが、イナゴをバッタとよぶ人は少ないと思いましたので、あえて上記のタイトルにしました。

夏目漱石の「坊ちゃん」では、主人公「坊ちゃん」は愛媛県松山の中学校に赴任します。赴任後、初めての宿直の日に、宿直室の寝床にいたずらな寄宿生にたくさんのイナゴを入れられて、知らずに寝床にもぐり込み、イナゴの襲撃を受ける場面があります。寄宿生たちを呼び出して、「なんでバッタなんか俺の床に入れた」と激怒しますが、「そりゃイナゴぞな、もし」と簡単にあしらわれる場面があります。「坊ちゃん」は都会育ちですから、イナゴもバッタも同じなのでしょう。

イナゴはイネの害虫で、他の水田害虫とともに防除の対象になっています。その一方、戦中、戦後の食糧危機のときは、イナゴはわれわれの貴重なタンパク源でもありました。現在では、珍品として佃煮にして売られています。善かれ悪しかれ、イナゴはわれわれにとって、とりわけなじみ深い昆虫です。

バッタの多くは、春、夏よりも、秋に成虫として、草むらを活発に飛びまわります。みずき野ではとくに、第2調整池の土手に、バッタやイナゴが多く生息しています。それらを含めて、みずき野周辺に見られるバッタとイナゴについて述べることにします。

### (1) ショウリョウバッタ、ショウリョウバッタモドキ、オンブバッタ

バッタには、頭部が三角形のものと、半円形のものがあります。この3種は頭部が三角形です。

この中でショウリョウバッタの雌は一番大きく、捕まえやすいバッタです。ショウリョウバッタは精霊バッタの意味で、お盆の頃に姿を現すからという説があります。捕まえて後脚を揃えてもつと、上下に体を振るのでコメツキバッタとも云いますが、子どもの頃、これをよくやったことを思い出します。

ショウリョウバッタの雄は雌と比べるとずっと細くて小さく、逃げ足も飛ぶ速さも

はるかに雌に勝っています。飛びながら、キチキチキチと羽音を出すので、キチキチバッタともよばれます。子どものころは、キチキチバッタがショウリョウバッタの雄とは知らず、別のバッタだと思っていました。



ショウリョウ  
バッタ雌  
9月下旬  
第2調整池



ショウリョウ  
バッタ雄  
10月中旬  
第2調整池

雌、雄とも、多くは緑色ですが、全身が褐色の個体もたまに見られます。

雄のショウリョウバッタの飛翔を詠んだ俳句を2句

街道を きちきちと飛ぶ

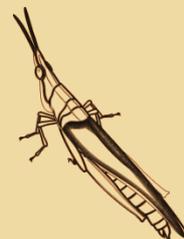
蟋蟀（ばった）かな

村上鬼城

きちきちと いはねばとべぬ

あはれなり

富安風生



ショウリョウバッタモドキは、ショウリョウバッタの雄に似ていますが、緑色が薄く、頭から翅の先まで、上面は茶色で、ショウリョウバッタとは簡単に区別がつけます。また脚が短く、後者より跳ねる力は弱いのですが、やはりよく飛びます。第2調整池の東の土手に多く生息しています。



ショウリョウ  
バッタモドキ  
9月下旬  
第2調整池

オンブバッタは小さなバッタですが、ごく普通にいて、草むらのみならず、家庭菜園や庭にも入り込んで、野菜や花卉の葉を食害します。雌雄がペアになっているを見かけることが多く、大きな雌が小さな雄をおんぶしているように見えるのでオンブバッタと名付けられています。緑色の個体が多いのですが、雌雄とも褐色の個体もあります。オンブバッタにも翅がありますが、飛ぶことはなく、跳ねるだけです。



オンブバッタ  
9月上旬  
3丁目東隣接地

## (2) ヒナバッタとイボバッタ

ヒナバッタもイボバッタも小型で、地味なバッタです。それでも注意してみると第2調整池周辺には、たくさん生息していることが分かります。ヒナバッタはとりわけ多く見られます。

ヒナバッタの体長は雄20ミリ前後、雌27ミリ前後。体色は褐色で、背面の両側に白い「く」の字があります。飛距離は短いのですが、すばしこいので、撮影に苦労します。普通は草むらの中にいますが、たまたま歩道に飛び出してきたところをカメラに収めました。



ヒナバッタ  
9月下旬  
第2調整池

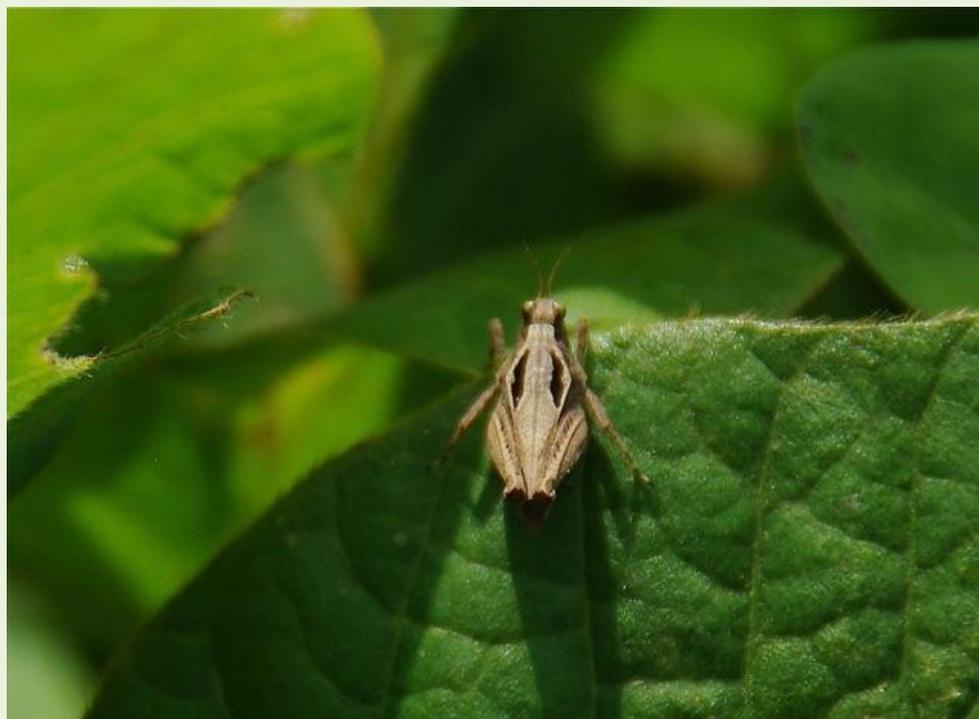


イボバッタ  
9月下旬  
第2調整池

イボバッタの体長は雄25ミリ前後、雌35ミリ前後。褐色ないし灰褐色で、草むらの中より、地面にいることが多いバッタです。背面がでこぼこして、いぼ状に見えることからイボバッタと名付けられています。

### (3) ヒシバツタ

ヒシバツタはヒナバツタやイボバツタよりさらに小型のバツタで、体長10ミリ内外です。体型は菱形で、色は茶色ないし灰色。背中の模様はきわめて多様です。飛ぶことはなく、もっぱら跳ねて逃げます。



ヒシバツタ  
9月下旬  
第2調整池

### (4) クルマバツタとクルマバツタモドキ

両種とも後述のトノサマバツタに似た大型のバツタでよく飛びます。

クルマバツタは翅に縦の白い帯があり、また背面の中央の隆起が著しいので、トノサマバツタと区別できます。また、後翅の中央に弓型の黒い帯状の模様があり、飛ぶときにこの模様が車の半円に見えることから、クルマバツタとよばれています。緑色型と褐色型があります。



クルマバッタ 10月上旬 3丁目東隣接地

クルマバッタモドキは、クルマバッタによく似ていますが、多少小さく、背面の隆起は低く、背面の両側の一対の「く」の字状の白い線があることによってクルマバッタと区別することができます。クルマバッタと同様、飛ぶときに車状の半円が見られます。褐色型が普通ですが、緑色型もあります。



クルマバッタモドキ 8月上旬 第2調整池

## (5) トノサマバッタ

トノサマバッタは大型で飛翔力も抜群。多分多くの人知っているなじみのバッタだと思います。今の子どもたちは、カブトムシやクワガタムシが好きですが、昔の子どもたちは、これらに加えて、トノサマバッタも好きでした。

私は子どもの頃、東京の町中に住んでいましたが、どこかのおじさんがトノサマバッタを大きな籠にたくさん入れて、子どもたちに売りにきたことを憶えています。子どもたちは、長い糸の先にトノサマバッタを結んで、飛ばして遊んだものです。トノサマバッタも緑と褐色の2型がありますが、緑の方が人気があったと思います。

9月～10月には、前述の第2調整池の土手にはかなり多くのトノサマバッタが棲んでいます。しかし、トノサマバッタはその名に似ず、イナゴ以上に臆病者です。10メートル先にでも、人影を見つけると、飛んで逃げてしまいます。

一番撮影しやすいのは、雄が雌の背中に乗っているカップルで、草むらからよく路上に出てきます。こういう状態では飛ぶことはできないので撮影は簡単。しかも雌雄両者が一度に撮れるので、一挙両得です。



トノサマバッタ 緑型 10月上旬 第2調整池



トノサマバッタ 褐色型 10月上旬 第2調整池

トノサマバッタは通常は無害な昆虫ですが、時として、恐ろしい虫に変身することがあります。トノサマバッタが異常に繁殖して高密度になると、体が黒化し、背面が平坦で、翅が長く、後脚の短いバッタが現れます。まるで別種のように見えますが、トノサマバッタが変身したすがたです。それらは飛翔力に勝れ、大群をなして緑地から緑地へ農作物を食い荒らしつつ大移動して行くという大害虫です。このような現象や個体を飛蝗（ひこう）とよびます。アジア大陸の草原では飛蝗の発生がよく起こるようですが、わが国でも北海道で明治13年に十勝地方に始まり、その後数年にわたって、広い範囲で飛蝗による大規模な災害が生じたそうです。

飛蝗がどのように襲来してくるか。パール・バックの小説「大地」には、その有様が迫力をもって画かれています。舞台は中国安徽省（あんきしょう）の或る農村。

「・・・ある日南の空に、小さなかすかな雲が見え出した。はじめは地平線上に小さく、霞のように見えた。風に吹かれる雲のようにあちこち動くのではなく、じっと止まっていたのだが、やがてそれが扇状にひろがりはじめた」（パール・バック著 朱牟田夏雄訳「大地（上）」講談社文庫版）。

やがて、バッタの大群がすがたを現し、空一面に広がり、土地一面を覆い、イネ科作物をことごとく食い尽くすのです。そして食糧が尽きると、次の緑地に向かって去って行きます。

## (6) ツチイナゴ

ツチイナゴはイナゴではなく、イナゴに比較的近縁の種で、トノサマバッタほどの大きなバッタです。成虫は頭の先端から翅の先まで、背中の中央に白い線が走っています。ツチイナゴという名称は、体色が土色だからだそうです。しかし幼虫は全身が緑色です。

ツチイナゴ以外のバッタは、秋に産卵後死んでしまいますが、ツチイナゴは成虫で越冬します。越冬後、成虫は春から初夏の頃産卵し、夏に孵化した幼虫は10月から11月頃成虫になります。



ツチイナゴ  
5月中旬  
貝塚地区



ツチイナゴ 幼虫  
9月下旬  
第2調整池

## (7) イナゴ

イナゴは、茶色の翅と背の両側に黒い線をもつ緑色のおなじみの昆虫です。

イナゴにもいくつか種類があって、一般にはコバネイナゴとハネナガイナゴがよく知られています。コバネイナゴは翅が短く、腹の先端を越えないか、多少越える程度です。一方、ハネナガイナゴは翅の先端が腹の先端をはっきりと越えています。

しかし、みずき野周辺にはコバネイナゴばかりで、ハネナガイナゴを見たことがありません。ハネナガイナゴは、群馬県、埼玉県、神奈川県では絶滅危惧種または準絶滅危惧種に指定されています。茨城県ではとくに指定はありませんが、やはり少なくなっているのではないのでしょうか。

コバネイナゴは、第2調整池の土手にたくさん生息しています。また、水田近くの道ばたの雑草の中にも多く見かけます。イナゴはその名の通り、本来はイネを好む昆虫ですが、近年は管理の行き届いた水田よりも、周辺の雑草の中で暮らす方が、食べ物は不味くても、生活は楽なのかもしれません。



コバネイナゴ  
9月下旬  
第2調整池

子どもの頃、足立区の荒川に沿う一帯には水田が広がっていました。私は弟と一緒に父に連れられて、家のあった荒川区から荒川の渡しに乗って、イナゴとりに行ったことを憶えています。もちろん食料にするためです。水田にはたくさんのイナゴが棲んでいました。東京の区内にそんなところがあったなど、いまは想像もできません。

最後に正岡子規の句を2句。

稲刈りて 水に飛びこむ 蝨（いなご）かな

我袖に 来てはね返る 蝨かな



水田は管理が行き届き、稲刈りは機械化された現在では、もはや見られない懐かしい情景です。

2015年11月  
本吉 總男

